

## 名古屋大学文学部社会学研究室「卒論作成マニュアル」

「おや、ソクラテス、いったいあなたは、それが何であるかがあなたにぜんぜんわかっていないとしたら、どうやってそれを探求するおつもりですか？ というのは、あなたが知らないものなのかで、どのようなものとしてそれを目標に立てたうえで、探求なさろうというのですか？ あるいは、幸いにしてあなたがそれをさぐり当てたとしても、それだということがどうしてあなたにわかるのでしょうか——もともとあなたはそれを知らなかったはずなのに。」プラトン『メノン』(BC386年?)

### 卒論の目的

- 1) 卒論は、研究なしには書けない。勉強が既知の事柄の学習であるのに対して、研究とは未知の事柄を自ら発見することである。研究には自主性と飛躍が不可欠である。
- 2) 卒論に取り組むことは、研究者志望でない人の能力開発にも役立つ。諸君が卒業後に求められる職業能力は、期末試験を解く能力よりも卒論を完成させる能力に似ている。

### 研究と読書

- 3) 研究のやり方がわからないという人は、伊丹(2001)、川喜田(1967)、小池(2000)、佐藤・山田編(2009)を読むこと。論文で何?という人は戸田山(2012)を参照。
- 4) 卒論の出来は就職活動が始まるまでの学問的読書量によって決まるという説がある。新3年生の諸君は、講義やゼミの課題とは別に、一日も早く自分の研究を始めてほしい。
- 5) 自分の研究を始めた人は、講義の聴き方も変わってくるはずである。観光バスの乗客としてではなく、見習い運転手のつもりで講義に臨んだほうが得るところは大きい。

### 主題と事例

- 6) 研究に値する主題を選ばなくてはいけない。何が意義ある主題であるかは、自分の関心だけでなく、時代の価値理念(Weber 1904=1998:99)との関連によって決まる。
- 7) 事例を全体のなかに位置づけなくてはいけない。さもなければ、その事例を研究する意義がわからなくなる。大きな視野を獲得するには、先行研究の検討が欠かせない。

### 仮説と調査

- 8) 調査は夏休みに実施すべきである。秋になってから始めたのでは、結果を分析したり、仮説を修正して再調査したりする時間がとれず、せっかく集めたデータを活かさない。

- 9) 調査の前に、まず面白い仮説を立てる必要がある。面白い仮説かどうかは先行研究を検討しなければわからないので、就活中も毎日卒論のことを考えなければ間に合わない。
- 10) 映画を観たり、歴史を調べたり、統計資料を集めたりすることも調査である。理論研究なら、まず誰がどんな学説を唱えているかを図書館で調査しなくてはいけない。

### 分析と結論

- 11) 先行研究や調査対象者の語りの受け売りで終わってはならない。距離をとるには分析が必要である。分析とは、分けたり、数えたり、比べたりしながら考えることである。
- 12) 論文の結論は、本論で述べた自前の分析に基づいて主張しなくてはいけない。いくら正しく美しく豪華な結論でも、自前の発見と論証に基づかない主張は空疎である。

### 形式と推敲

- 13) 論文は私的ノートではなく、読者の説得をめざす公共的営為である。読者に読んでもらえる文章に仕上げるには、推敲のための時間が必要である。上田（1961）を参照。
- 14) 論文の形式については日本社会学会編集委員会編（2009）を遵守すること。このガイドの源流の一つは、名古屋大学文学部社会学研究室編（1999）である。併読してほしい。
- 15) 剽窃は許されない。それは他人の貢献を蔑ろにするだけでなく、自分の貢献を台なしにする行為である。無事に卒業したければ、細心の注意を払って避けるべきである。

### 文献

伊丹敬之，2001，『創造的論文の書き方』有斐閣。

上田良二，1961，「西川先生の論文校訂」

[www.lit.nagoya-u.ac.jp/~kamimura/nishikawa.htm](http://www.lit.nagoya-u.ac.jp/~kamimura/nishikawa.htm)

川喜田二郎，1967，『発想法——創造性開発のために』中公新書。

小池和男，2000，『聞きとりの作法』東洋経済新報社。

佐藤健二・山田一成編，2009，『社会調査論』八千代出版。

戸田山和久，2012，『新版・論文の教室——レポートから卒論まで』NHKブックス。

名古屋大学文学部社会学研究室編，1999，『卒業論文の TATSUJIN への道』

[www.lit.nagoya-u.ac.jp/~socio/koza/tatsujin.html](http://www.lit.nagoya-u.ac.jp/~socio/koza/tatsujin.html)

日本社会学会編集委員会編，2009，『社会学評論スタイルガイド（第2版）』

[www.gakkai.ne.jp/jss/bulletin/guide.php](http://www.gakkai.ne.jp/jss/bulletin/guide.php)

Weber, Max, 1904, *Die Objektivität sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis*. (= 1998, 富永祐治・立野保男訳, 折原浩補訳『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波文庫.)